

高校進学時の暦年少者の状況と暦年長者を凌駕していく3年間の追いかけてよう!

「21世紀出生児縦断調査」から見えるもの

○内田照久 (大学入試センター), 橋本貴充 # (大学入試センター), 山地弘起 (大学入試センター)

キーワード: 大学入試センター試験, 月齢, 発達

問題と目的

これまで、児童-生徒の月齢差を大学入試のデータから見つけ直す研究を進めてきた。その研究の中で、学年コーホート内では、暦年齢が高いほど、大学入試センター試験の志願率が高いことが示された。一方、月齢が低い暦年少者では、国公立大学の合格率が逆に高いことを発見した(内田・橋本・山地, 2021)。

この一見矛盾する結果を検討するため、1月生まれと7月生まれの者を、20年にわたって追跡している厚生労働省と文部科学省の共管調査である「21世紀出生児縦断調査」の公開データを分析した。

方法

調査対象者 平成13(2001)年に生まれた子どもの中で、1月10日~17日に生まれた者と、7月10日~17日に生まれた者。

調査実施日 毎年1回、1月生は1月18日、7月生は7月18日を調査日として追跡調査を実施。

分析データ 中学1年から、高校3年までに相当する第13~18回の調査の公開データを分析した。なお、第13回調査の回収数は30,331名(回収率89.5%)。

結果と考察

分析の結果、高校進学時には、暦年少者は選抜性の高い高校への進学が少なく、進路に不満を感じていたことがわかった。しかし、高校3年間の教科別の学力の自己評価を追跡してみると、暦年少者の高1当初の自己評価は、暦年長者より低かったが、高3になるとそれが逆転していることがわかった(Figure 1-3)。

暦年少者は、高校進学時には学力面で不利な状況が見られたが、その後の学習の過程で学力が伸び、学力意識としても自覚されたと考えられる。そして、高校終了時のセンター試験での成績、大学合格の形で実を結んでいると解釈することができる。

付記 研究援助: JSPS(JP20K03353, JP20K20421)

引用文献

内田照久・橋本貴充・山地弘起 (2021). 大学入試センター試験志願者の暦年齢別の構成比率と大学合格率の特徴 日本教育心理学会第63回総会発表論文集, 483.

文部科学省 (2020). 21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児). Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa08/21seiki/1380892.htm (April, 21, 2014)

Figure 1

中学1年時と高校1年時の授業内容の理解度

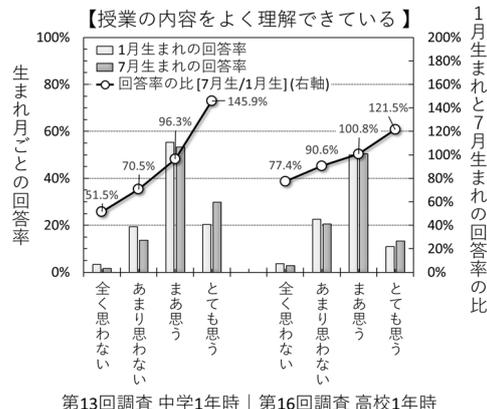


Figure 2

高校1年時の進学高校等の設置者と学校の満足度推移

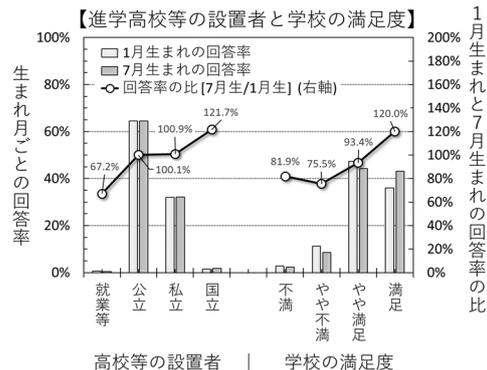


Figure 3

高校1年時と高校3年時の教科別の学力自己評価

